



# 第35回六甲クイーンズオープン

7月15・16日 / 神戸六甲ボウル

## 寺下智香が大会連覇で5勝目



優勝決定戦唯一のダボを決めてガッツポーズの寺下。これが優勝につながった

▲この大会の連覇は寺下が初だった

第35回六甲クイーンズオープントーナメントは、プロ76名、アマ19名が参加して行われたが、永久シード(通算20勝)に王手がかかっている姫路麗(33期・フタバボウル)を、ディフェンディングチャンピオンの寺下智香(47期・スガイディノス/サンブリッジ)が優勝決定戦で下し連覇を達成した。(主催：(株)グランド六甲)

永久シードに王手のかかっている姫路が「絶対にこの大会で決める」と、気合十分に予選からトップを快走、いちども首位を明け渡すことなくトップシードを決めた。前年優勝の寺下がぴったりマークで2位、松永裕美が、数日前に寝違えて体調万全ではなかったものの3位につけ、TV決勝最後の枠には本間由佳梨が佐藤まさみを7ポイン

ト逆転して入った。

### 4位決定戦

2つのスプリットなど「合わせ切れないで終わってしまった」と振り返った本間を、ターキースタートなどの松永が225:188で退けた。

### 3位決定戦

1フレからストライクの応酬となったが、ともに5フレまで5連発のあと、松永は「ちょっとのミスがああいう結果になるのは、私の詰めの甘いところ」と悔やんだ6フレが、④⑥⑩のスプリットでオープン。6フレもストライクでリードを広げた寺下が、245:232で松永を下し、連覇へ望みをつないだ。

### 優勝決定戦

前半はともに我慢の展開のなか、姫路の6フレは⑧⑩と割れ



▲この大会でという思いが強かっただけに、姫路はしばらく顔を上げられなかった

てオープン。一気に突き放した寺下の7フレは⑥⑩のスプリット。「投げたあとで、1本取っておけばよかったと後悔した」2投目はノータッチで、この時点で1ピンビハインドに。しかし9フレから初のダブル。姫路も10フレ1投目ストライクだけに、勝負を決めるにはもう1発欲しい2投目は薄めで8本カウント。優勝をかけた姫路の2投目は、「思いどおりの打球だったけど、結果的に厚め」で④が残り、192:185で寺下に軍配が上がった。

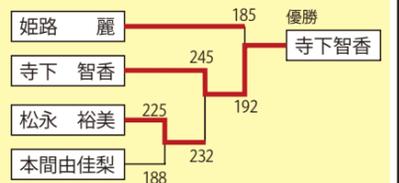
### 寺下のコメント

9フレからダボれたのは、去年よりも成長できたかなと思うけど、10フレ2投目、決められなかったのもまだまだ。(姫路の20勝を期待する会場の雰囲気)正直やり辛さはあった。ただ私も連覇への重圧

があったけど、姫路さんの20勝の重圧の方が大きかったと思う。相性のいい六甲で優勝できてうれしい。(優勝ボール：DV8インスティゲーターBWカンタム・パイアス・パール RADICALグル・フォース)



▲ベストアマは総合19位の縄江仁美選手



### 優勝決定戦

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
姫路 麗	8	9	9	9	9	⑧	1	9	9	9
	19	38	58	78	96	105	125	145	165	185
寺下智香	1	9	9	9	9	9	9	9	9	9
	20	39	58	78	98	116	124	144	172	192

## FOCUS UP

## 地元・神戸で復帰後初入賞!“ミラクルレディ”中谷優子プロの現在・過去・未来



▲7月22日、神戸ハーバーランドにて取材

P★リーガー時代のキャッチフレーズは“神戸の弾丸娘”。刈り上げショートヘアのデビュー当時から「ボウリングがすべて」の人生をエネルギーに歩んできた中谷優子プロが今年4月、ママさんボウラーとなって公式戦のアプローチに帰ってきた。復帰3戦目、ジュニア時代のホームグラウンド・神戸六甲ボウルで開催された六甲クイーンズ(別掲)で早くも17位入賞を果たして健在ぶりを証明したが、「実は前日までずっと悶だしていた」と本人は苦笑する。

「娘(歩純ちゃん=1歳)が39度の高熱を出して、1週間くらいおさまらなかったの、試合前はほとんど投げられなかったんです。自分も産後腱鞘炎で、痛みがひどいときは箸も持てないくらい。六甲の前日も痛み止めの注射を打って、ボールを前に転がせられるのか?という状態で出場したので、15ゲームを投げ切って賞金をとれたのは奇跡的なこと。もうホントに“必死のパッチ”でした(笑)」  
思えば中谷プロは、過去にも何度か劇的なミラクルを引き起こしている。プロテストを受け

た1995年(平成7年)は、1月17日に阪神淡路大震災が発生して自宅が半壊。家族6人でワンボックスカーに寝泊まりする避難生活を余儀なくされ、「1カ月余り投げられなかった」状況下で、見事一発合格を勝ちとった。

また、公式戦初優勝時(ネビアカップ98)には、前日にバイクで転倒事故を起こし、大会後に肋骨を2本骨折していたことが判明。「自分でも折れていると思ったけど、病院に行ったら絶対止められるので(笑)、とりあえず会場に行って、投げられなかったらブラインドして帰ってこよう…」という、見切り発車の末のVゴールだった。

「プロテストのときは『これで受からんとダメでしょ』とヘンに燃えていたし、初優勝のときもアドレナリンが出まくってました。人前に出て投げるのは痛み止めより効きます。ドMなんですかね(笑)」

### ここから始まる第2章

3年前、13歳年下の平岡勇人プロ(53期)と結婚したのも、ある意味ミラクルといえる。

「平岡は、自分が18歳でプロになった年に、当時の所属先の神戸スカイレーンで作ったジュニアクラブの生徒さん第1号なんです。彼のお父さんが会員ボ

ウラーで、それこそ赤ちゃんのころから知っていて、将来結婚する相手とはツクとも思わずに接していました(笑)」

そんな平岡プロから突然結婚を申し込まれたのは2015年の夏。「チャレンジャー精神がわいたのでは?」と笑うが「『人生、ボウリング以外にも楽しいことはいっぱいありますよ』と言われて…。ボウリングをやったない人にそう言われたら腹立つけど(笑)、自分もプロになってボウリングを好きでいてくれる人なので、素直に聞くことができた」という。もともと家族のような間柄だから、「今はそばにいてくれるだけで心が安らぐ」そうだ。

一方で不測の出来事もあった。夫妻で所属していた神戸スカイレーンが4月20日をもって閉鎖。「それを震災の日(1月17日)に聞かされて、わが家も激震に見舞われた(苦笑)」そうだが、捨てる神あれば拾う神あり。プロ協会の谷口健会長の橋渡しで、取り急ぎ行き場をなくした会員ボウラーの受け入れをお願いに行ったラウンドワンが、思いがけず2人そろって雇い入れてくれることに。これもまたミラクルだ。

新しい所属先の看板を背負った初戦で幸先よく入賞を果たし、さらなる活躍に周囲の期待

も膨らむ中谷プロ。この先、具体的な目標は定めていないが「結果を残したいという気持ちは結婚前より強くなっている」という。

「子どもが生まれて、以前のように自分の好き勝手には試合に出られないし、よくも悪くも自分次第という気持ちでは投げられない。力のある若い人も増えてきて、加齢による自分の体力の衰えなどを考えると、優勝を争えるところまで行くのは簡単ではないですが、その思いが失ったものを凌駕してくれるかも…という期待はあります」

「ミラクルレディ・中谷優子物語」の第2章は、まだ幕を開けたばかりだ。



なかに・ゆうこ / 1977年3月26日、兵庫県神戸市生まれ。155cm、右投げ。95年プロ入り(28期/ライセンスNo.289)。公式戦優勝8回。公認パーフェクト2回。P★League優勝3回。ラウンドワン/ハイスポーツ社所属。